

君死にたまうことなかれ —与謝野晶子と日露戦争—

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

末っ子の籌三郎ちゅうざぶろうとは少女の頃から仲がよかった。ふたりとも大の文学好きだったからだ。浪漫派の歌人として脚光を浴びた姉の与謝野晶子(1878-1942)は2歳年下の弟をだれよりも可愛がった。

だが予期せぬ事態によって晶子はひどく狼狽する。24歳になった弟が帝政ロシアとの日露戦争に駆り出された。実家の和菓子屋の跡取り息子である弟は結婚したばかりだった。わずか10カ月で別れてしまう新婚夫婦が不憫でならない。

出征した弟の生還と戦争の早期終結を願って晶子は「君死にたまうことなかれ」を発表する。渾身の反戦詩は物議を醸し、非国民と非難され、富国強兵に沸き立つ世間から孤立した。晶子の炎のような激情は冷たい逆風のなかで燃えあがる。

旅順攻囲戦における悲嘆

晶子は現在の大阪府堺市の老舗和菓子店である駿河屋の三女として生まれた。本名は鳳志ほうしよう。男子の誕生を望んでいた両親から疎まれて育つ。

家業は傾きかけていたものの、聡明な晶子は幼い頃から漢学塾で学び、琴や三味線も習う。堺市立堺女学校(大阪府立泉陽高校)に入学し、文学少女として『源氏物語』などの古典や尾崎紅葉、幸田露伴、樋口一葉らの小説を読み耽った。

末弟の籌三郎の紹介で浪華青年文学会に参加し、店番をしながら文芸誌に短歌を投稿する。歌会で有名歌人の与謝野鉄幹と出会い、鉄幹が創刊

した『明星』にたびたび作品が掲載されるようになった。晶子は妻子のいる鉄幹と相思相愛の仲となり、格好のスクンダルとして世間を騒がせた。

実家を出て東京に移り住んだ晶子は1901年、鉄幹の支援で処女歌集『みだれ髪』を出版する。女性の自我や恋愛を赤裸々に謳った「やわ肌の 熱き血潮に ふれも見て さびしからずや 道を説く君」などの一連の作品は保守的な歌壇から一斉に反発された。ところが女性や若者の反響を呼び、熱心な読者に支持され、鉄幹と晴れて結婚する。

日露戦争が始まる前年の1903年に父が亡くなり、電気工学者として東大の教授になった長男に代わって籌三郎が店を継いだ。中国・遼東半島の旅順に要塞を構えた帝政ロシアの東方侵攻を阻止し、勢力圏を奪回するために日本軍は旅順攻囲戦に乗り出そうとしていた。

開戦後の1904年、晶子は予備陸軍歩兵少尉として従軍した弟に「君死にたまうことなかれ」と呼びかけて『明星』に掲載する。全5節で構成された長編詩は「あゝ、弟よ君を泣く 君死にたまうことなかれ 末に生まれし君なれば 親のなさけはまさりしも 親は刃やいばをにぎらせて 人を殺せと教えしや 人を殺して死ねよとて 二十四まで育



与謝野晶子

てしや」という悲嘆の叫びで始まっている。晶子の鋭いまなざしは弟が人に殺される善良な被害者で終わらないことを見抜いていた。加害者として人を殺してしまう悲惨さを何よりも恐れていた。

まことの心を歌いたく

反戦の意志を公然と掲げた晶子に文芸評論家の大町桂月が猛烈な批判を浴びせてきた。桂月は総合雑誌『太陽』の文芸時評で「家が大事なり、妻が大事なり、国は滅びてもよし、商人は戦うべき義務なしと言うは、余りに大胆すぎる言葉なり」と罵倒する。これに対して晶子は『明星』11月号に寄稿した「ひらきぶみ」で「桂月様、たいそう危険な思想と仰せられ候へど、当節のように死ねよ死ねよと申し候こと、又なにごとにも忠君愛国などの文字や、畏れ多き教育御勅語などを引きて論ずることの流行は、この方かえって危険と申すものに候」と自由な言論を圧殺する排外主義的な風潮に警鐘を鳴らす。そして「歌は歌に候。歌詠み習い候からには、私どうぞ後の人に笑われぬ、まことの心を歌いおきたく候」といかなる状況でも心のままに歌うことを宣言した。

同時に「平民新聞とやらの人たちの御議論などひと言ききて身ぶるい致し候。さればとて少女と申す者だれも戦争ぎらいに候」と述べ、平民新聞の論調と無関係であることを明確にした。平民新聞は社会主義者の幸徳秋水、堺利彦らが創刊し、大々的に非戦論を展開していた。当初は万朝報で黒岩涙香、内村鑑三らと論陣を張っていたものの、社主の黒岩が主戦論に転じて3人は退社し、幸徳と堺は社会主義、内村はキリスト教徒の立場から戦争反対を唱えていた。とりわけ日露戦争を帝国主義国家間の市場争奪戦と主張した幸徳は検挙されて禁固5カ月の刑を科せられた。社会主義者ではない晶子は東京朝日新聞に掲載されたロシアの文豪トルストイの日露戦争反対論『悔い改めよ』に影響を受けていた。

まったく反省しない晶子に怒りをつのらせた桂月は『詩歌の骨髄』と題した論稿で「詩歌も、状況によっては国家社会に服すべし」「皇室中心主義の眼をもって晶子の詩を検すれば、乱臣なり、賊子なり、国家の刑罰を加うべき罪人なりと絶叫

せざるを得ざるものなり」と批判をエスカレートさせた。桂月の執拗な攻撃は鉄幹と弁護士の平出修による直談判でようやく終息する。

女性解放のシンボルに

社会主義者と一線を画していた晶子も幸徳らが無実の罪で処刑された大逆事件では哀悼の歌を東京日日新聞に寄稿した。とくに女性でただひとり死刑になった菅野須賀子が弁護士の平出に晶子の歌集の差し入れを頼んだ際、自分が出向かなかったことを深く後悔する手紙を送っている。

女性解放運動の先駆者・平塚らいちょうを中心とする史上初の女性文芸誌『青鞥』が1911年に発刊された。創刊号では「山の動く日きたる」という一節で有名な晶子の詩が巻頭を飾った。翌年、フランスのパリに渡航し、平塚らいちょうら500人が見送っている。費用の工面は森鷗外などが手伝った。同年、読売新聞の新連載「新しい女」の第1回に登場し、女性解放のシンボルとなった。

婦人参政権を求めて山田耕耕作曲『婦選の歌』の作詞を手がけ、1918年から新たに母性保護論争が話題を呼ぶ。妊娠・出産・育児期の女性は国家に保護されるべきと主張する平塚らいちょうに「婦人は男子にも国家にも寄りかかるべきではない」と女性の経済的自立を促した。両者に対して山川菊栄は社会主義による解決を訴えた。教育の民主化では1921年、鉄幹らと日本初の男女共学を実現した文化学院を創設する。

文学の面では『源氏物語』の現代語訳に執念を燃やす。文化学院に保管していた原稿が1923年の白昼発生した関東大震災で灰塵と化し、さらに17年かけて6巻本の新訳を完成させた。

1940年、脳出血で右半身不随となり、2年後に63歳で逝去する。「君死にたまふことなかれ」で嫌戦の歌人と呼ばれた晶子は第1次世界大戦、第2次世界大戦を通じて戦争を美化する歌を詠むようになっていた。しかし死後に発見された1937年の未発表の歌では「秋風や いくさ始まり 港なる ただの船さえ 見て悲しけれ」と日中戦争の拡大を憂慮する歌を残している。

日露戦争から無事に生還した弟の籌三郎は晶子のあとを追うように2年後に他界した。